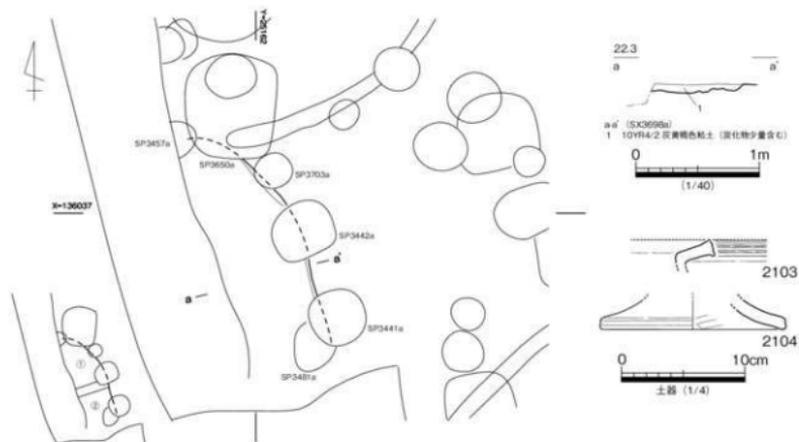


第6項 不明遺構

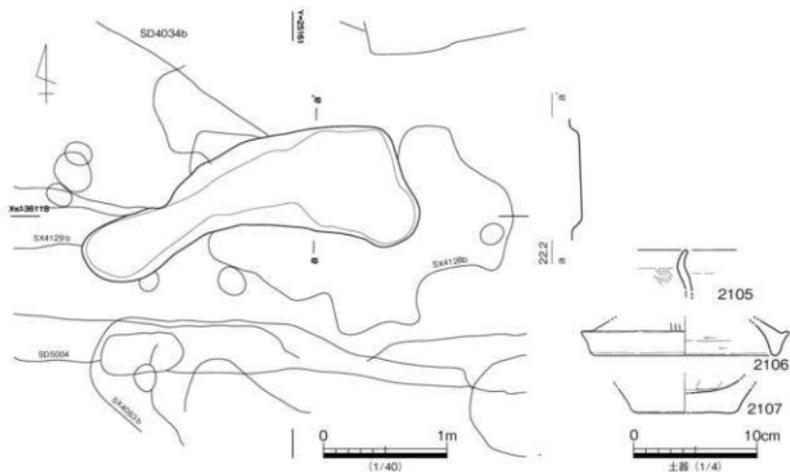
(1) SX3698a

3区中央西端で検出した浅い段状の遺構である。図示していないが、西側に平成7年度調査の研修棟調査区SH01があり、その付属的な落ち込みの可能性はある。

後期前半の甕、支脚が出土した。



第309図 不明遺構 SX3698a 平・断面図 出土遺物実測図



第310図 不明遺構 SX4081b 平・断面図 出土遺物実測図

(2) SX4081b

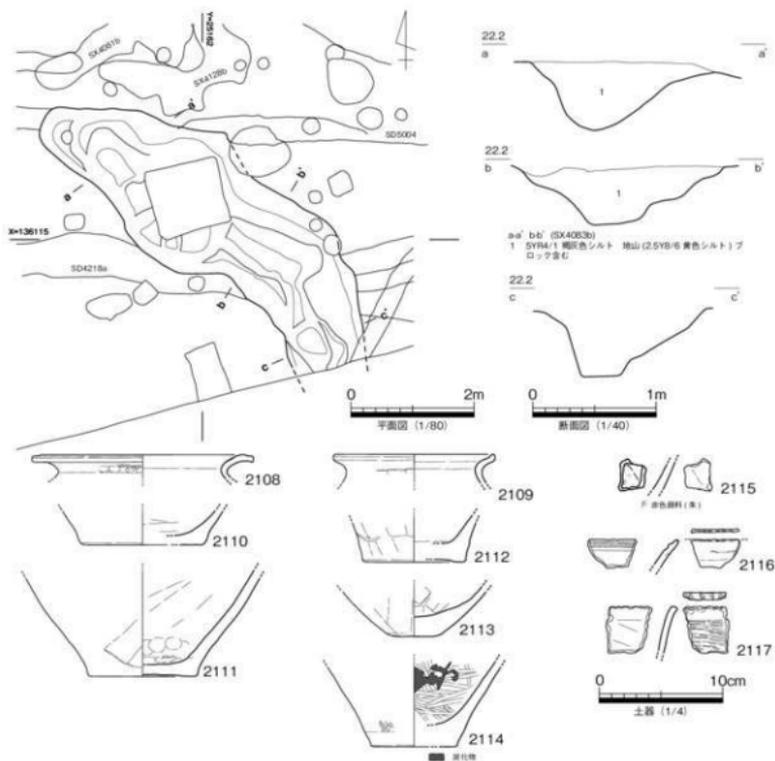
4区北半には不定形に蛇行しながら流下する溝が複数あり、溝と把握することが困難な落ち込みも複数ある。当遺構もその一つで、最大幅0.9m、深さ0.1mの規模で断面形は皿状を呈し、埋土下部に微細な土器片の集積層があった。

2105～2107の後期前半の土器が出土している。

(3) SX4083b

4区北半で上記のSX4081bの南側で検出した不定形な溝状の落ち込みである。規模は幅1.5m、深さ0.4～0.55mと大きめである。出土遺物は縄文晩期土器片を含み、弥生後期から終末期の時期幅のある土器が出土し、須恵器や土師器は含まないことから、終末期までに埋没した落ち込み遺構と考えられる。

出土遺物には内面に朱が付着した土器が含まれる。

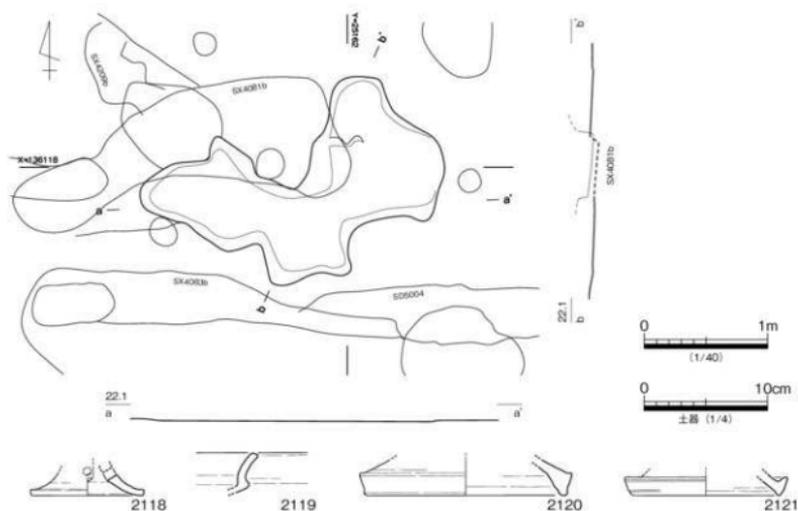


第311図 不明遺構 SX4083b 平・断面図 出土遺物実測図

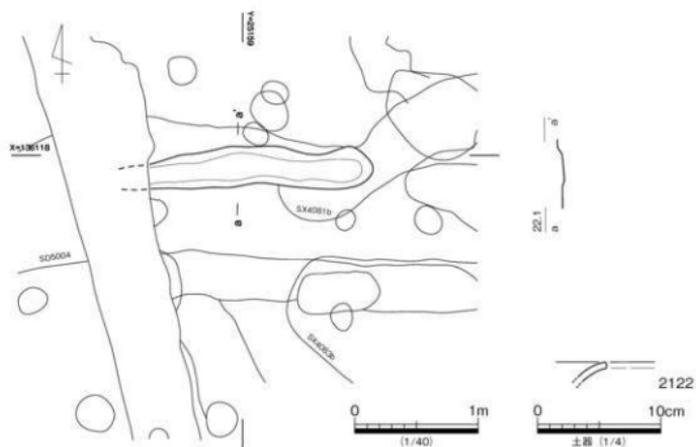
(4) SX4128b

4区北半で検出した不定形な溝状の落ち込みである。上述のSX4081bに隣接し、堆積状況もよく似ていることから、同じ遺構である可能性が高い。埋土下部には土器小片の集積がある。

出土した土器は後期前半の土器で占められ、SX4081bも含めてその時期に埋没したものと考えられる。



第 312 図 不明遺構 SX4128b 平・断面図 出土遺物実測図



第 313 図 不明遺構 SX4129b 平・断面図 出土遺物実測図

(5) SX4129b

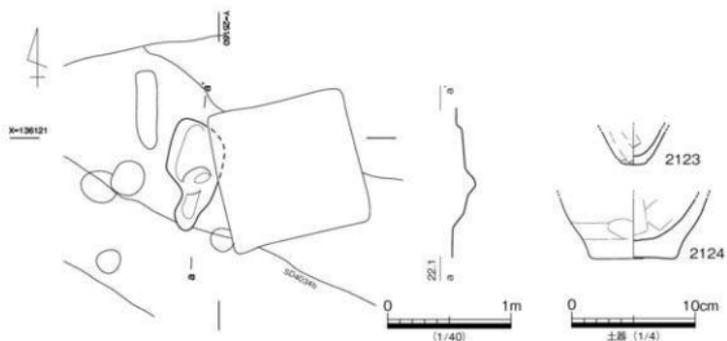
4区北半で検出した浅い溝状の遺構である。上述のSX4081bの西側に接続する。甕口縁部片が出土した。

(6) SX4196b

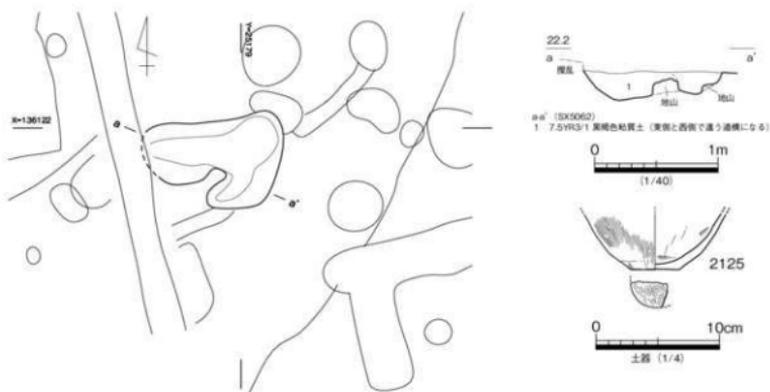
4区北端の遺構である。不定形な落ち込みで、埋土中より小形鉢と土器底部が出土した。鉢の形態から後期後半古段階の埋没と推察する。

(7) SX5062

5区北東付近で検出した不定形な落ち込み遺構である。埋土は黒褐色粘土で平面形は「V」字状を呈してつながっているように見えるが、調査記録では左右で別の遺構になる可能性を指摘している。いず



第314図 不明遺構 SX4196b 平・断面図 出土遺物実測図



第315図 不明遺構 SX5062 平・断面図 出土遺物実測図

れにしても形態的に遺構の性格を判断するのは困難である。

後期後半の鉢底部が出土した。

(8) SX5067

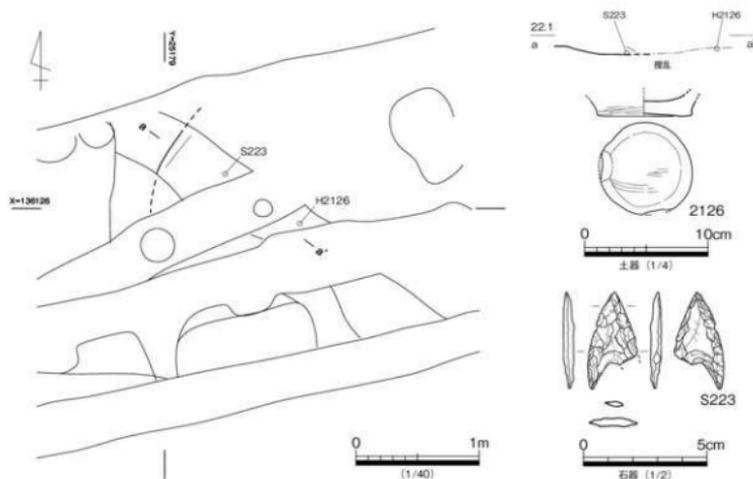
5区北端の幅広く浅い落ち込み遺構である。縄文土器深鉢底部と基部の逆刺が長いササカイト製の凹基式石鏃が出土した。縄文期の自然地形を反映する落ち込みであろう。

(9) SX5105

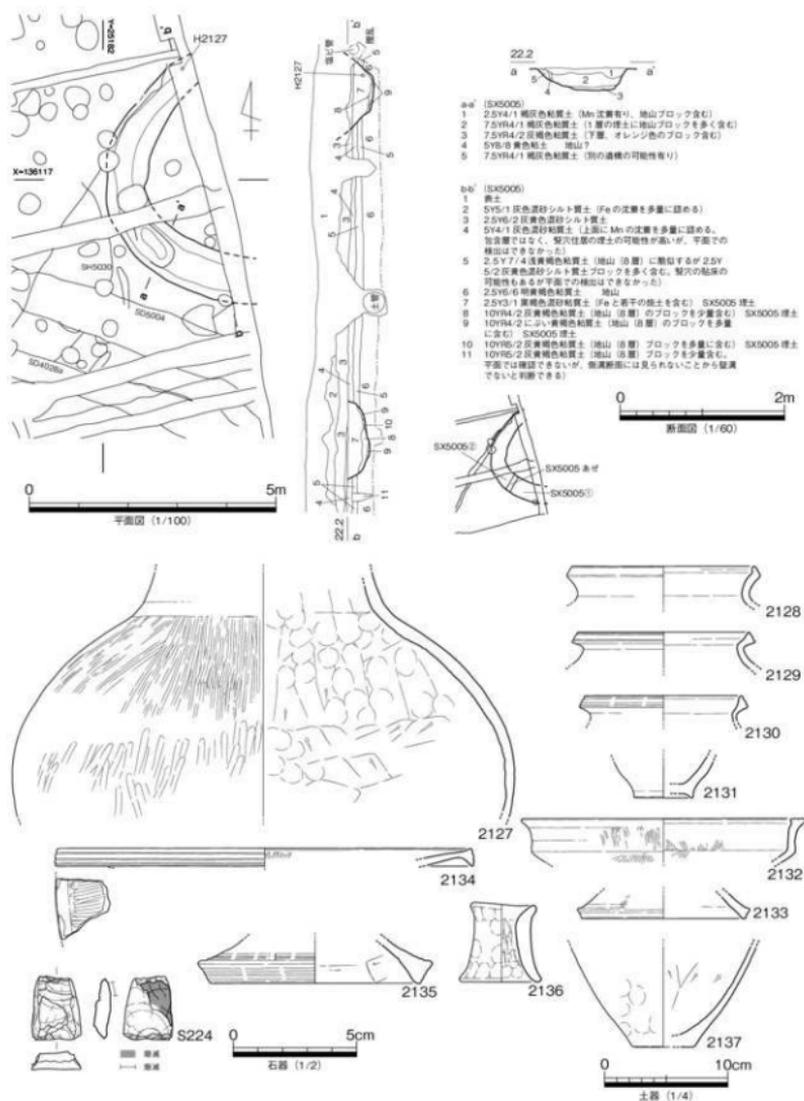
5区東端で検出した円形周溝遺構である。検出した半円形に巡る溝から、直径約4mの推定円丘部を幅約1m、深さ0.3mの断面蒲鉾状の溝が囲繞する全体形を推察した。aライン断面部分で周溝底に土坑様の表現があるが、断面に示したように極めて浅い段である。

出土遺物は後期前半新段階の土器片が多い。2127は頸部がやや内傾気味に立ち上がり、長めの頸部が付く広口壺である。後期前半新段階に属す。2128～2130は口縁部が肥厚し退化傾向にある凹線文を施すもので後期前半に属する。2132の高杯は屈曲口縁の端部がまだ拡張する形態をとどめるもので後期前半新段階に属す。

以上の出土遺物により後期前半新段階に構築し廃絶した円形周溝遺構と推定した。囲繞された中心箇所での調査が行われていないため、墳墓であるか否かの判断は難しい。出土した土器は生活雑器と特段変化しない器種であり、現時点では墳墓かどうかの判断は保留しておく。



第316図 不明遺構 SX5067 平・断面図 出土遺物実測図

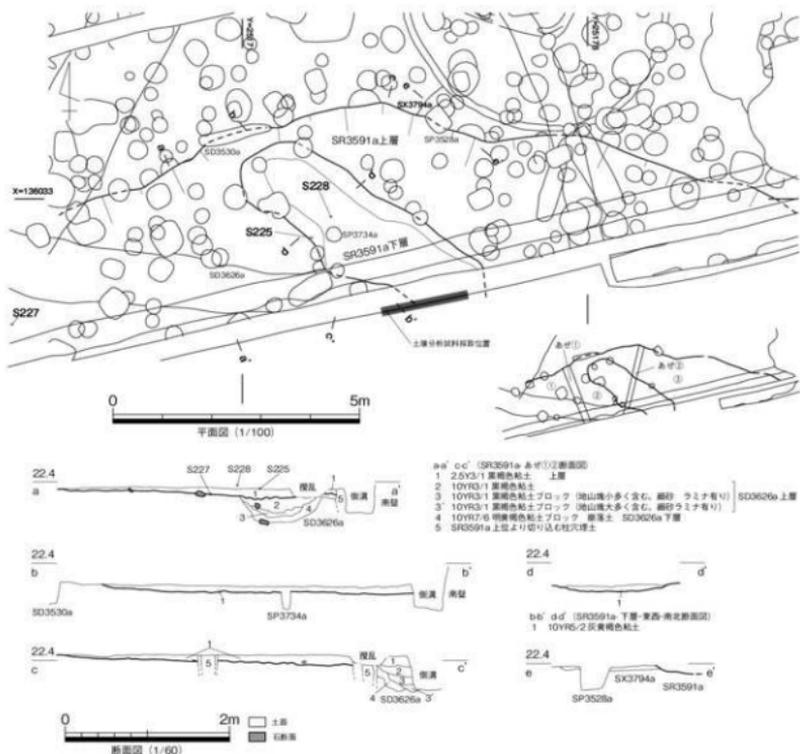


第317図 不明遺構 SX5105 平・断面図 出土遺物実測図1

第7項 自然河川

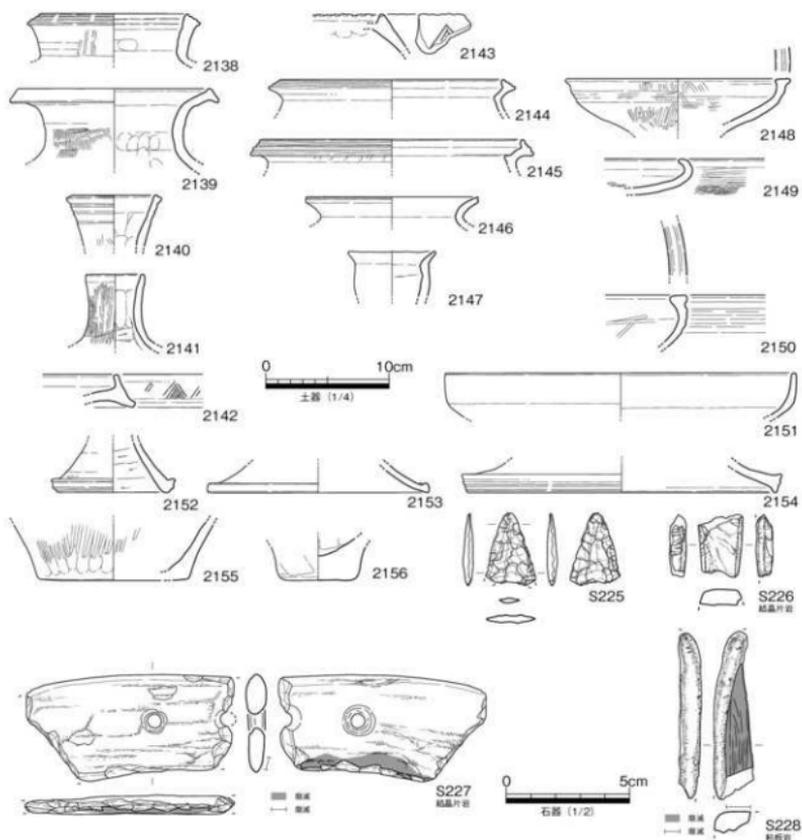
(1) SR3591a

3区南端で検出した南に緩やかな弧を描いて東から西に流れる自然河川の北岸の自然傾斜である。河川の本体は旧練Ⅱ報告書SR02にあって、本体に向かって緩やかに傾斜する微高地縁辺の堆積層である。堆積層は上層が黒褐色粘土で、下層の基盤土ブロック層が僅かに残る。出土遺物のほとんどは上層で出土したもので、下層出土品は2144・2148・2150・2155の4点のみである。いずれも中期後半段階に属す。従って、旧練ⅡのSR02中層に当たるものと推察する。上層は旧練ⅡのSR02上層溝上層からSR02上層に当たり、後期前半古段階から終末期の土器が出土した。



第318図 自然河川SR3591a 断面図

石器はS226が結晶片岩製の小形の加工用斧の破片で、小形方柱状片刃石斧の可能性が高い。S227は結晶片岩製石應丁で刃部は打製により刃をつけるが、器体に紐掛け穴2孔があり、背部や刃部に部分的に研磨がみられる。破損後の再加工も顕著な個体である。S228は黒色の粘板岩を素材とする砥石である。細長い砥石の一部だが、もともと小形品で手持ち砥石の可能性が高い。研磨面は#4000の平滑度である。



第319図 自然河川SR3591a出土遺物実測図

第 8 項 建物に伴わない柱穴

建物との関係性が不明な柱穴を一括して報告する。

(1) 1 区の柱穴

SP1027c は 1 区東端で検出した柱穴で後期後半古段階の壺 2158 が出土した。

SP1049c は 1 区東端検出の土坑で連鑄式銅鏃 M86 が出土した。

SP1073a は自然面が多く付着するサヌカイト製の剥片 S229 が出土した。

SP1085b は断面が矩形の棒状鉄片 M87 が出土した。図の上端は折損、下端は古い破断面が摩耗する。

SP1103 は 1 区中央付近の SB1354a と重複しそれを切る柱穴である。出土した土器は中期後半新段階に属す。

SP1105 は 1 区中央北端で検出した大形柱穴である。調査区の北側に展開する掘立柱建物を構成する柱穴であろう。後期前半古段階の長頸壺 2161 が出土した。

SP1109a は 1 区西端の SB1348a と重複して検出した柱穴である。埋土より後期前半古段階の甕が出土した。

SP1114a は 1 区西側の竪穴建物 SH1020a に切られる小規模な柱穴である。後期前半古段階の高杯が出土した。

SP1117a は 1 区中央南端で検出した小柱穴でサヌカイト製スクレイパー 1 点が出土した。

SP1144a は 1 区西端で検出した大形の柱穴である。本遺跡の中期の遺構で最も古い時期となる中期前半新段階の甕 2164 が出土した。その時期の掘立柱建物が存在するものと考えられる。

SP1149a は SH1020a に切られる柱穴である。後期前半の台付鉢で、SH1020a の上限を示す土器である。

SP1198a は SH1207a に切られる柱穴である。後期前半古段階の高杯 2166 が出土した。

SP1202a は 1 区西側の SH1207a と重複する位置で検出した小形柱穴である。平基式のサヌカイト製打製石鏃 S231 が出土した。

SP1213a は 1 区中央南端で検出した柱穴である。時期は不明だが、小形の打製石鏃 1 点が出土した。

SP1257a は SH1020a に切られる柱穴である。平基式のサヌカイト製打製石鏃が出土した。

SP1313a は 1 区西側南端で検出した柱穴である。サヌカイト製の楔状石核 S234 が出土した。

(2) 2 区の柱穴

SP2018a は SH2010a の壁溝内で検出した小柱穴である。打製石鏃の未製品が出土した。

SP2021a は SH2100a を切る小柱穴である。終末期の鉢 (2168) が出土した。

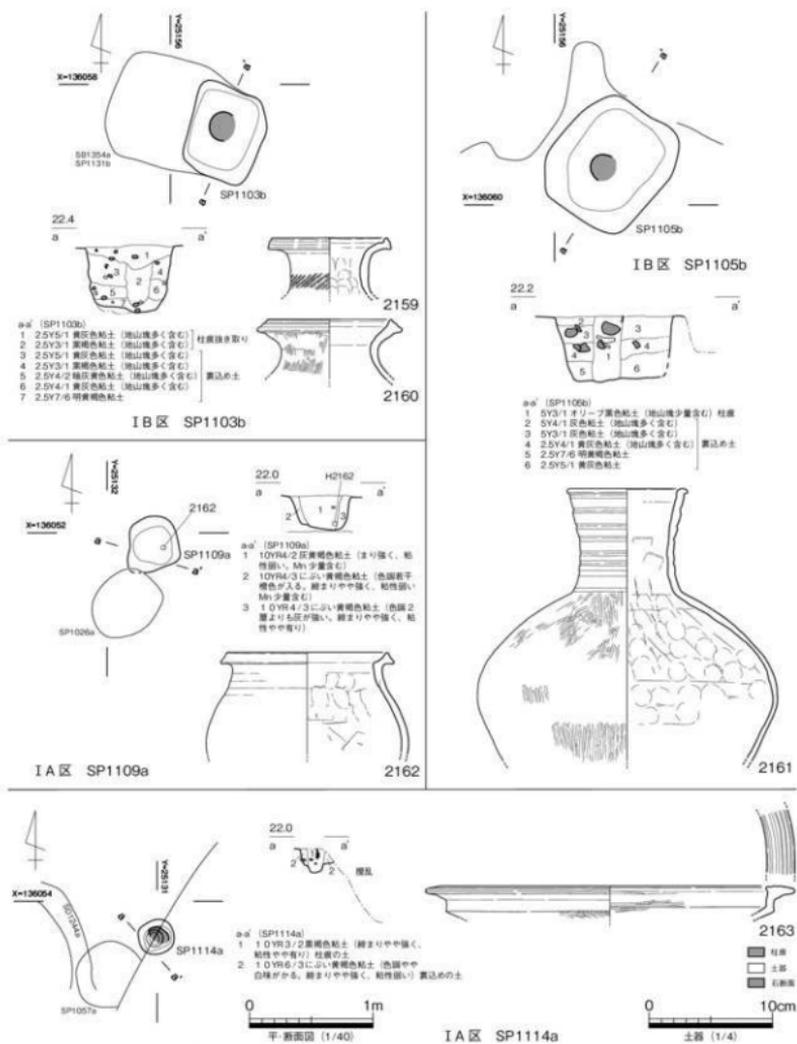
SP2022a は 2 区西側で検出した小柱穴である。平基式打製石鏃が出土した。

SP2138b は 2 区西端で検出した大形の柱穴である。調査区の東に展開する建物を構成する柱穴と考えられる。S28 はサヌカイトの不定形な剥片を楔状石核に用いたものである。

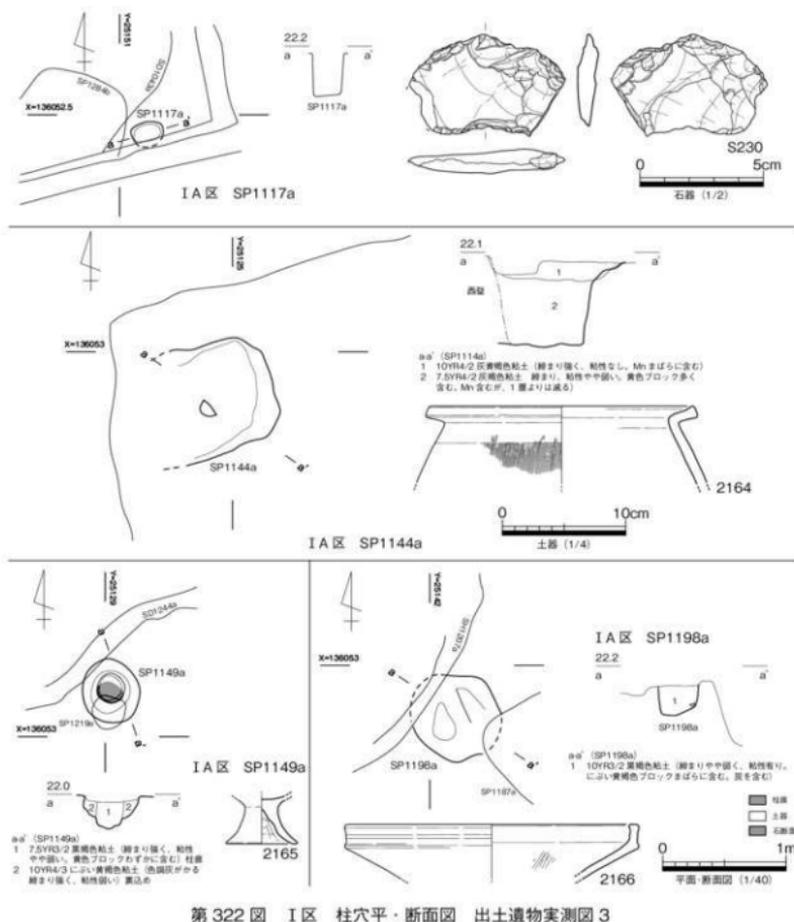
SP2158a は 2 区北東で検出した柱穴である。S239 は安山岩製砥石で、# 1500 ~ 2000 の平滑度である。

SP2168a は 2 区北東で検出した小柱穴である。SH2224a を切る柱穴で古墳時代前期初頭の甕 2169 が出土した。

SP2181a は SH2224a と重複する柱穴である。埋土より高杯 2170 が出土し、後期後半古段階に廃絶した建物との時期差はほとんどない。



第 321 図 I 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 2



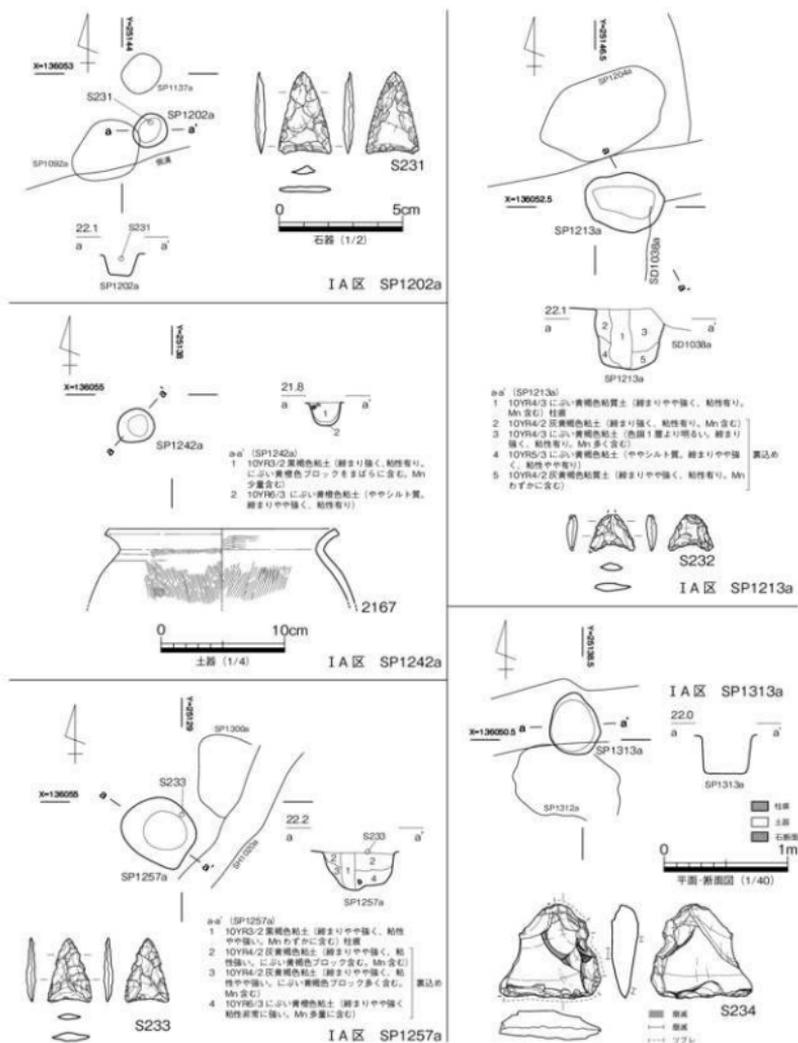
SP2235aはSH2224aに切られる柱穴でミニチュア壺2171が出土した。後期前半に属す。

SP2257は2区東北端で検出した小柱穴である。口縁部が上方に大きく拡張した備後系の甕が出土した。後期後半古段階に属す。

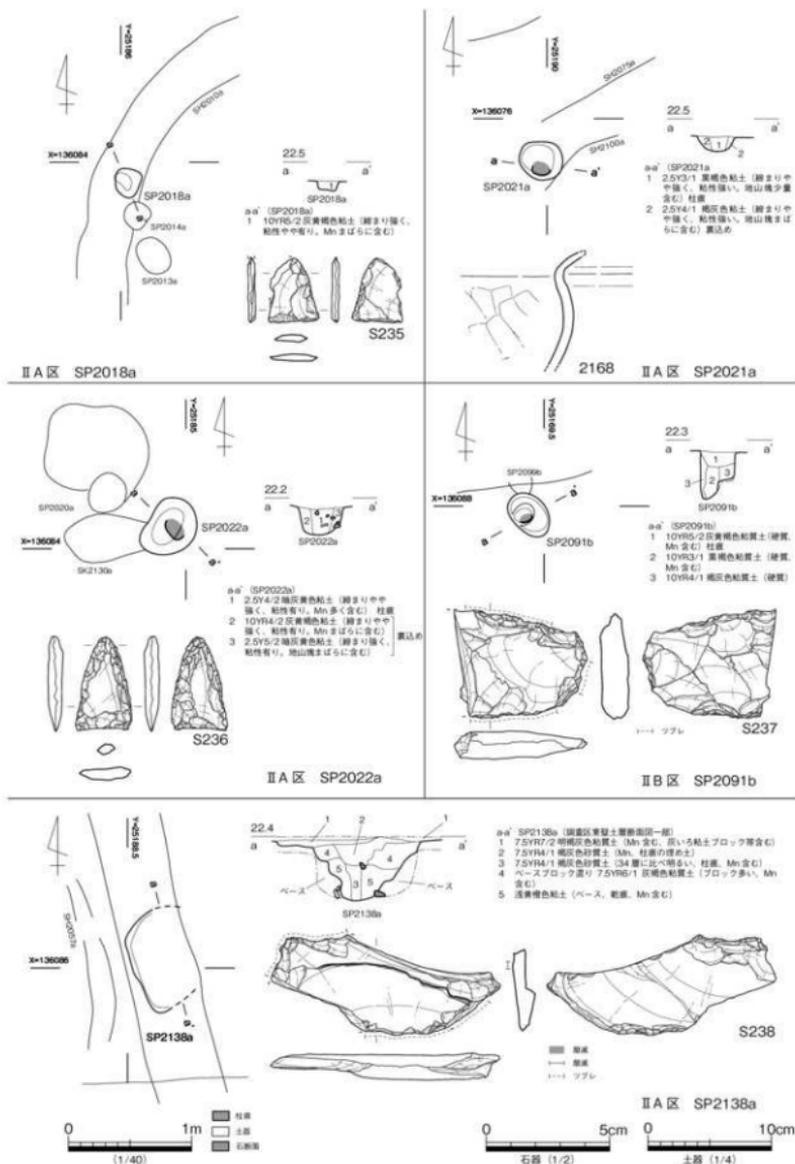
SP2271はSH2224aに隣接する柱穴でサヌカイト製楔状石核S240が出土した。

SP2348aはSH2010aに切られて検出した小柱穴である。S241の有茎式打製石鏃が出土した。

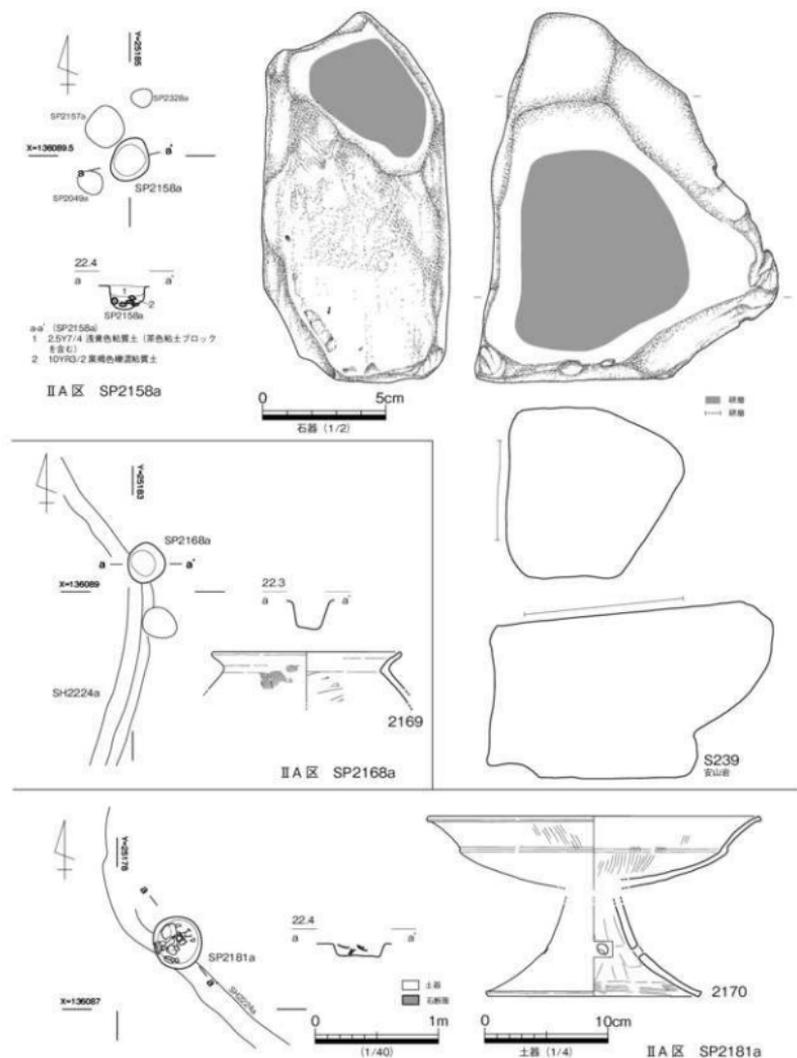
SP2365aは2区南西端で検出した小柱穴である。小規模な割に土器が多数出土した。後期前半古段階に属す。2173は口縁上端に竹管円形浮文を貼付する長頸壺である。



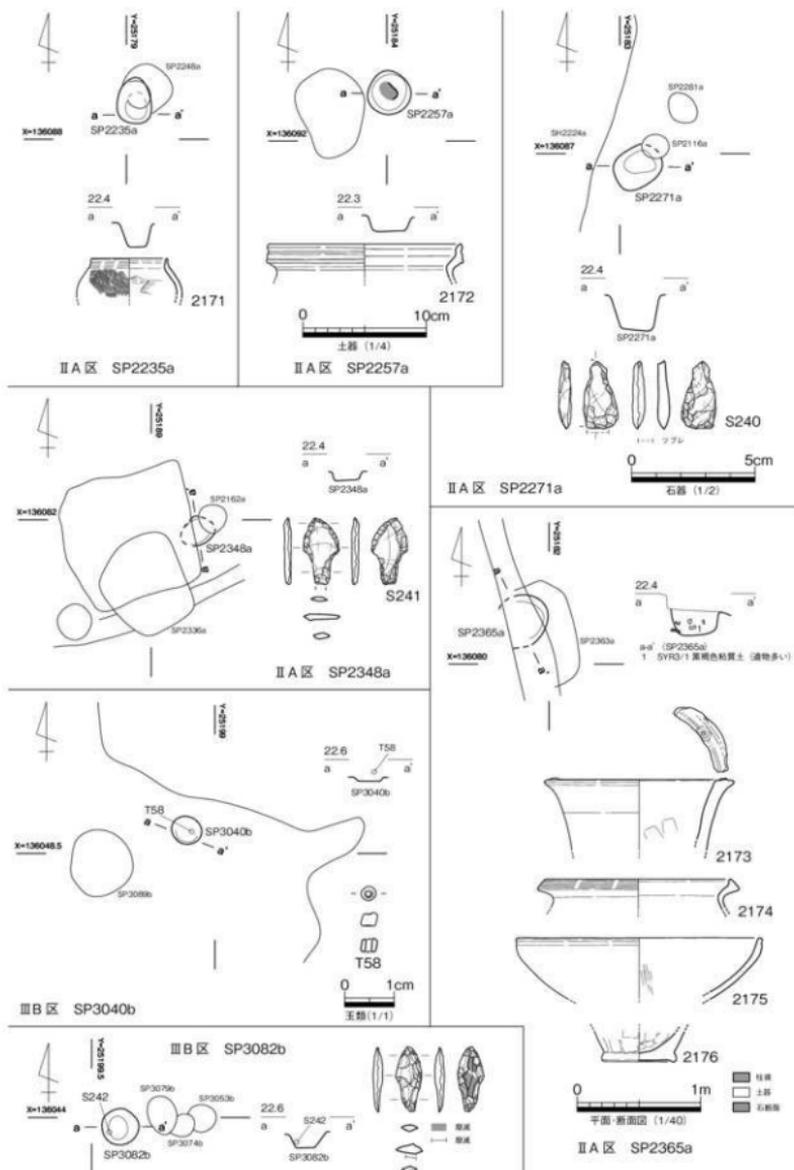
第 323 図 I 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 4



第 324 図 II 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 1



第 325 図 II 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 2



第 326 図 II 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 3

(3) 3 区の柱穴

SP0011a は 3 区検出の柱穴である。後期後半古段階の台付鉢 2157 が出土した。

SP3040b は 3 区中央東端で検出した浅い小柱穴で埋土中より T58 のガラス小玉が出土した。淡青色を呈し、酸化カリウムが多いタイプのカリガラスを素材とする。

SP3082b は 3 区中央東端で検出した小柱穴である。埋土より S242 の有蓋式打裂石鎌が出土した。器面が磨滅しており、打裂石庖丁の転用品と考えられる。

SP3088b は 3 区南東で検出した柱穴である。廃絶時に柱抜き取り後の柱痕に S243 の安山岩製砥石が投棄されていた。表裏面全体は緩く磨滅するが、部分的に強く # 2000 ~ 4000 の磨滅がある。

SP3098b は 3 区中央東端で検出した小柱穴である。廃絶時に土器と共に多量の円礫を柱抜き取り後の柱痕に廃棄する。2177 は口縁部が強く外反し下部部に段を残す後期後半古段階の高杯である。

SP3224b は SB3388b を切る柱穴である。裏込め土より 2179 の小形鉢が出土した。終末期に属す。

SP3225b は 3 区中央東で検出した柱穴である。後期前半新段階の長頸壺系諸の広口壺 2180 が出土した。

SP3244a は 3 区中央北端で検出した大形の柱穴である。中期後半新段階の甕 2181 が出土した。

SP3247b は 3 区中央東側で検出した柱穴である。サヌカイト製の楔状石核 S244 が出土した。打点を転移しながら表裏から剥片を剥離する過程がみられる。

SP3312b は SH3245b の床面で検出した柱穴である。柱穴が深く、上部を削平された痕跡がないことから、本来 SH3245b に伴う柱穴である可能性が高い。M88 は銅鉄で本体中央の鎬が明瞭に残る。側縁の形状から柳葉形の外形をなすものと推察する。連鑄式銅鉄の連鑄部の切断後に研ぎ上げられたものであろう。堅穴建物 SH3245b に伴うとすれば、後期後半古段階に属す。

SP3278a は 3 区中央西側で検出した小規模な柱穴である。埋土より中期後半古段階の無頸壺 2182 が出土した。

SP3291a は 3 区中央西側で検出した柱穴である。終末期に属す丸底の鉢が出土しており、周辺の堅穴建物に関連する柱穴である可能性が高い。

SP3314b は SH3245b を切る柱穴である。出土した 2184 の高杯脚は本来 SH3245b に属したものと推察する。

SP3342a は 3 区西側で検出した柱穴である。打裂石庖丁を転用した石鎌 S245 が出土した。

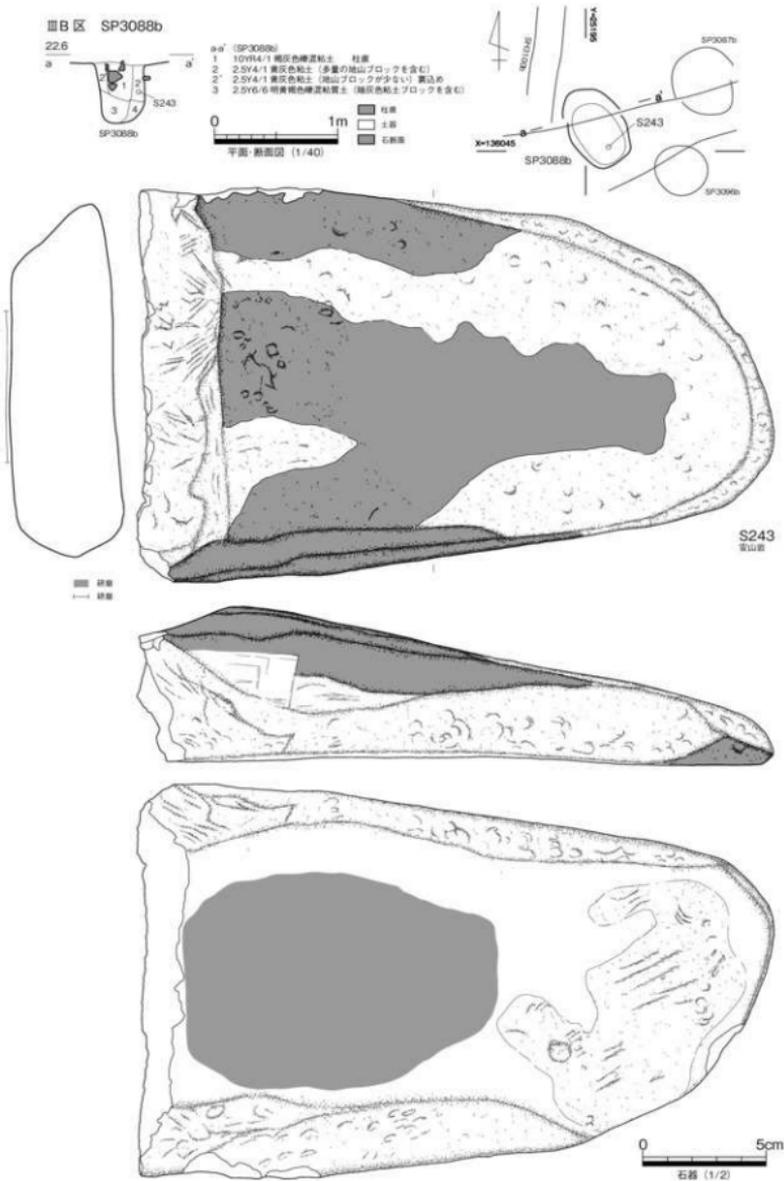
SP3385b は 3 区北東で検出した柱穴である。後期後半古段階に属す土器底部 2185 が出土した。外面丹塗りや備中産の搬入品である。

SP3587a は 3 区南西で検出した小柱穴である。埋土から軽石の楕円礫である。図の下半部に直線的に研磨した痕跡が認められる。

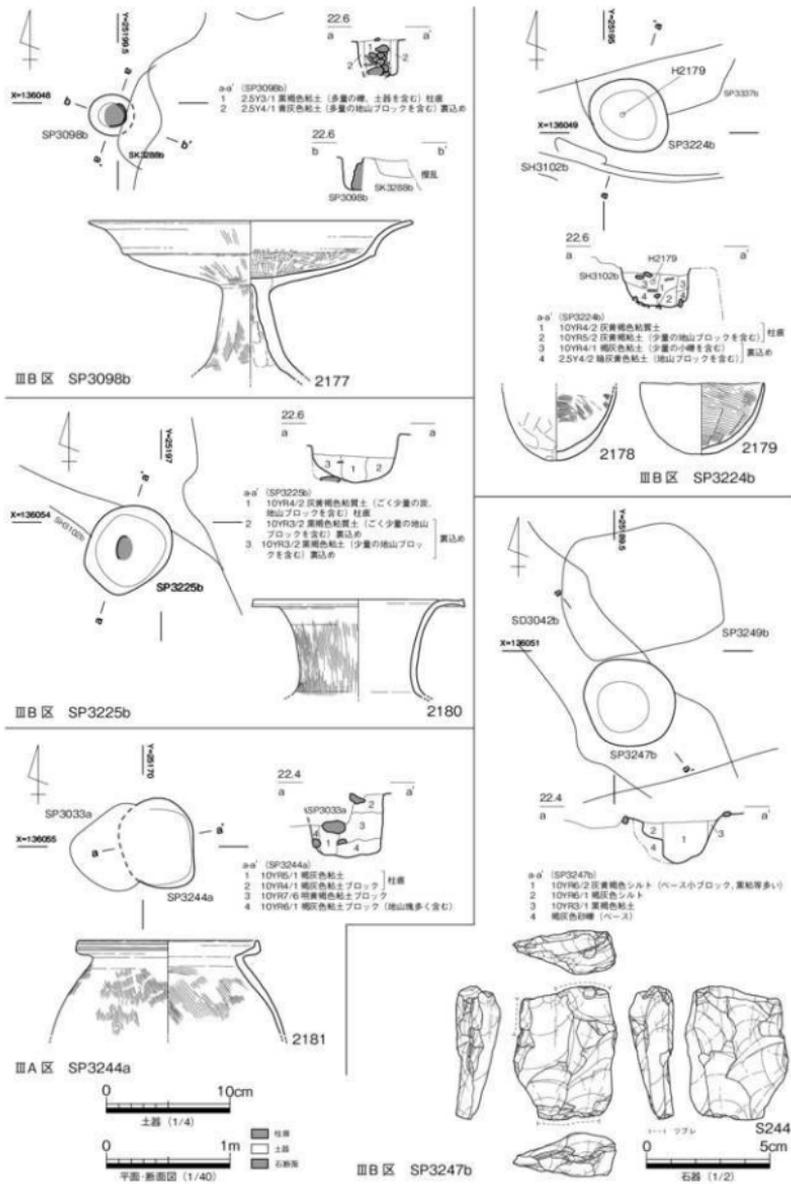
SP3603a は 3 区中央南端で検出した小柱穴である。出土した砂岩製砥石は #4000 の平滑度の砥面を 4 面にもつ。

SP3711a は 3 区中央部で SH3726 を切る柱穴（土坑）である。埋土中に炭化物を多く含む。終末期新段階の土器が出土した。

SP3724a は 3 区中央付近で検出した円形遺構である。中期後半新段階の堅穴建物 SH3726a を切る。直径 0.8 m、深さ 0.4 m で断面は円筒形である。柱痕は検出していないことから土坑とすべき遺構である。埋土中には粘土ブロックや炭化物を多く含んでいることから、堅穴建物の中央土坑の可能性は高いが、組み合う柱穴は明らかでない。終末期古段階の甕 2189 や鉢 2192、後期後半新段階の甕 2190 が出土した。



第 327 図 Ⅲ区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 1

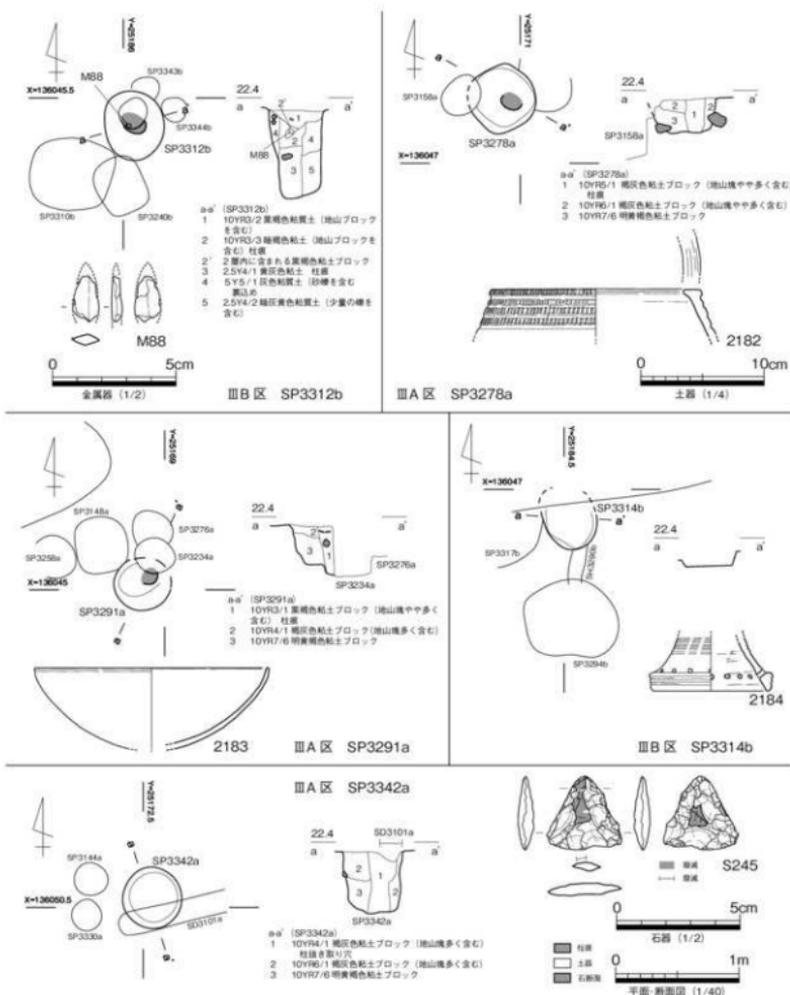


第 328 図 III 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 2

遺構は終末期古段階に埋没したと推察する。

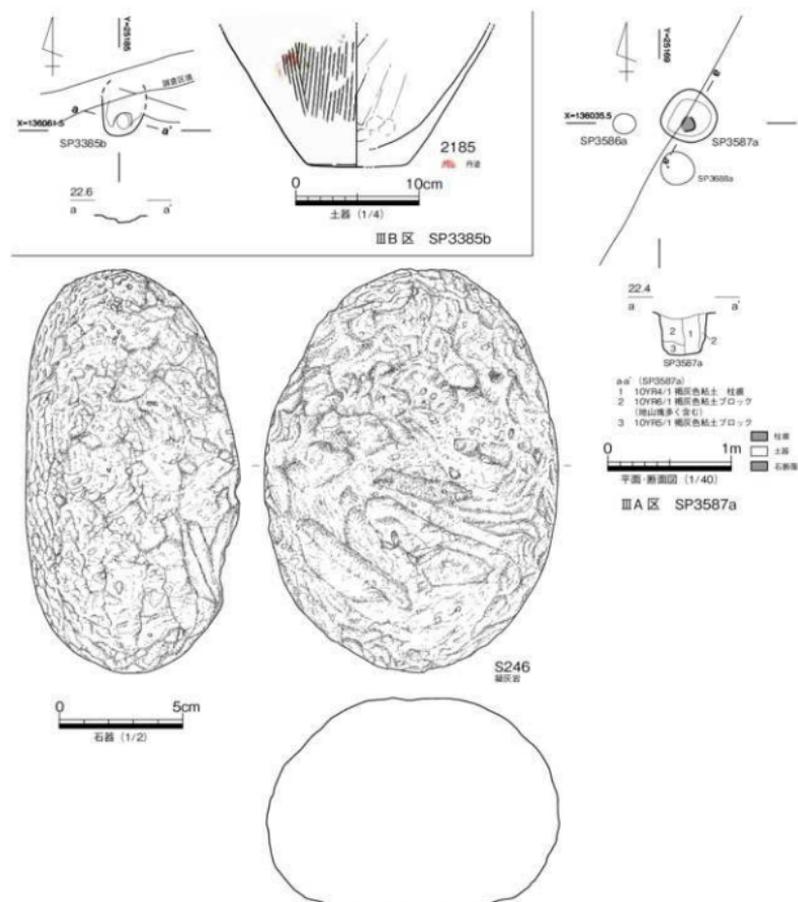
SP3814a は 3 区中央付近で検出した小柱穴である。後期前半新段階に廃絶した掘立柱建物 SB3914a の構成柱穴である SP3883a を切る。柱抜き取り後の柱痕から 2194 の後期前半古段階の甕が出土しているが、SB3914a が後期前半新段階に廃絶した建物であることから、この土器自体は混在品である。

SP3830a は 3 区中央南端で検出した小柱穴である。後期前半古段階の細頸壺 2195 が出土した。



第 329 図 III 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 3

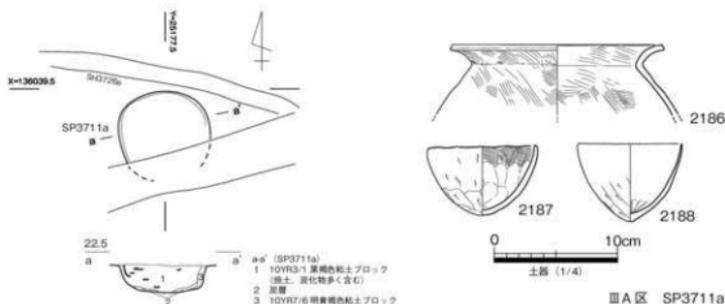
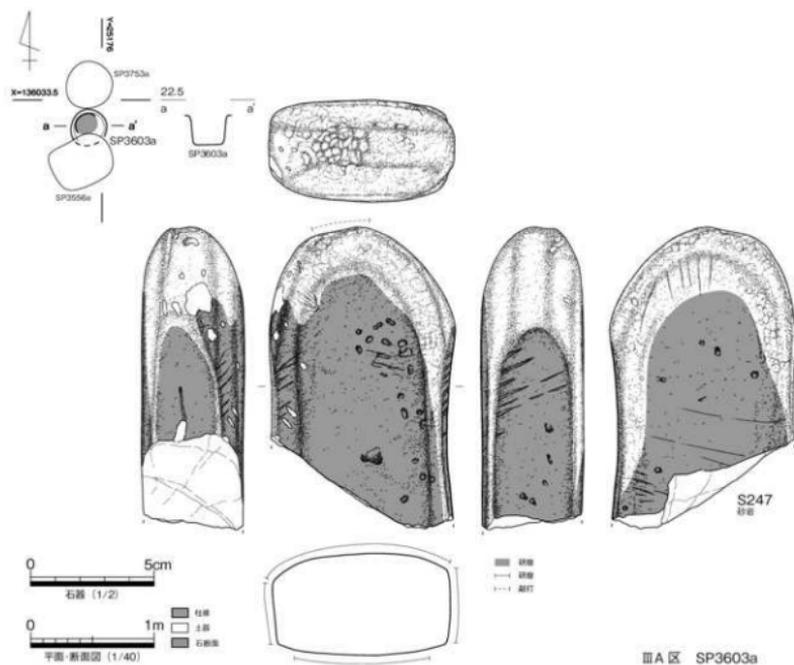
SP3866a は 3 区中央南端で検出した小柱穴である。後期後半古段階の鉢底部 2196 が出土した。
 SP3929a は 3 区南端やや西寄りで見出した小柱穴である。中期後半新段階の大形鉢 2197 が出土した。
 SP3959a は後期前半新段階に埋没を開始した堅穴建物 SH3842a を切る小柱穴である。後期後半古段階の甕 2198 が出土した。
 SP3964a は 3 区中央南寄りで見出した小柱穴である。後期前半古段階の焼成後穿孔の甕 2199 が出土した。



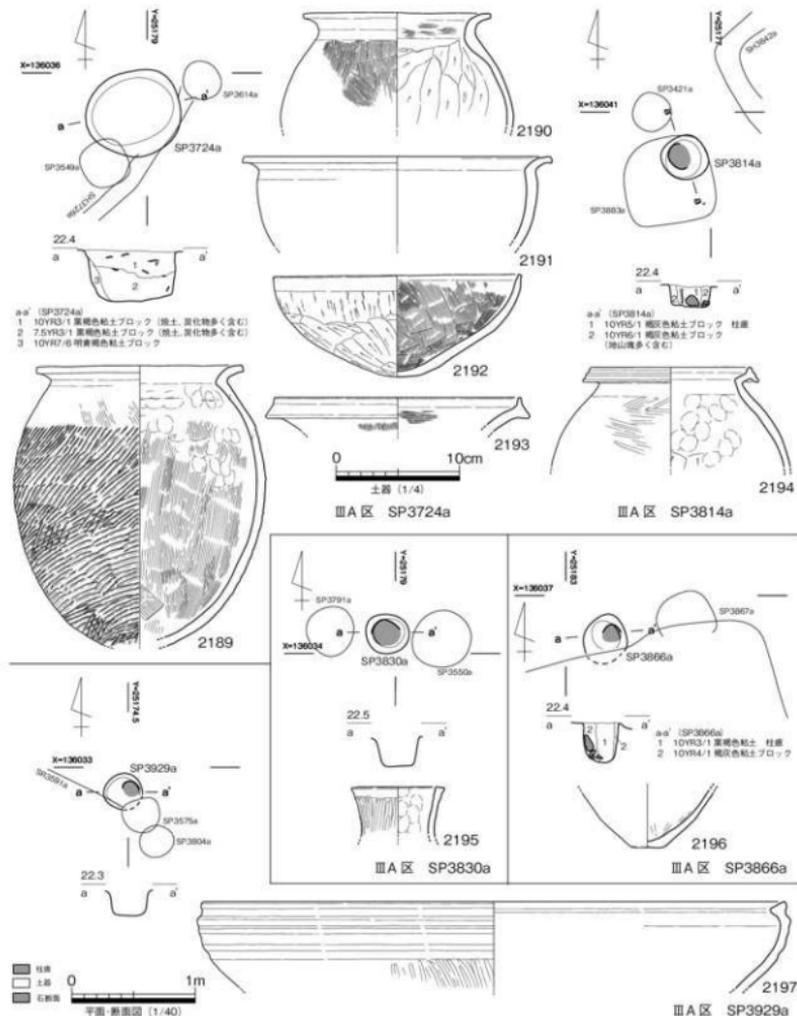
第 330 図 III 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 4

SP3969a は竪穴建物 SH3726a に切られる小柱穴である。ササカイト製石錐 S248 が出土した。下端の作用部は折損する。

SP3982a は 3 区中央部の竪穴建物 SH3842a に切られる小柱穴である。小形のササカイト製打製石錐 S249 が出土した。



第 331 図 Ⅲ区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 5



第 332 図 III区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 6

(4) 4 区の柱穴

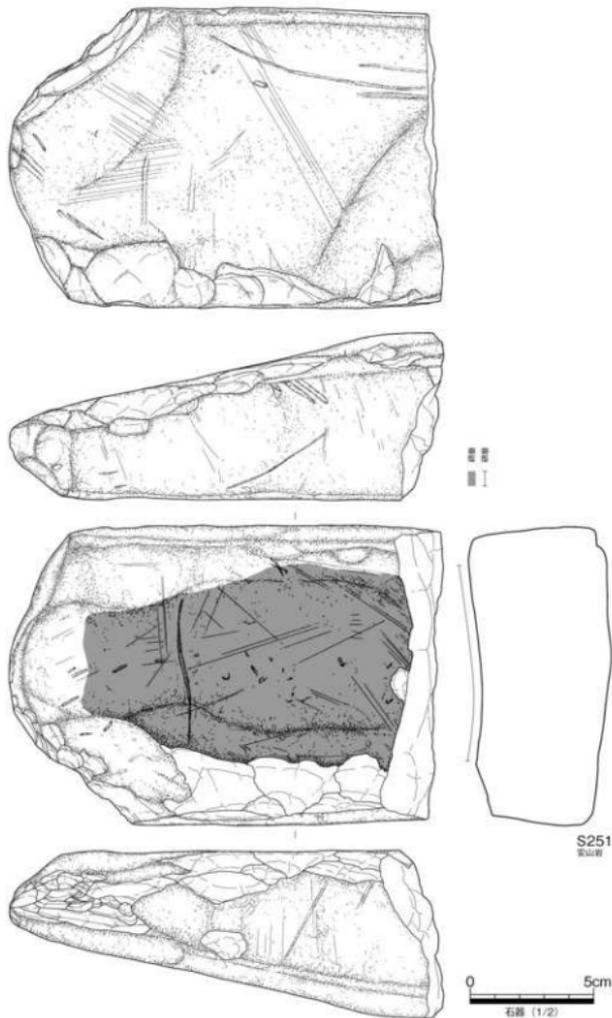
SP4038a は竪穴建物 SH4108a に切られる柱穴である。後期後半新段階に属す鉢 2200 が出土した。

SP4098b は 4 区北端で検出した小柱穴である。後期前半新段階の甕 2201 が出土した。

SP4104a は 4 区東側で検出した小柱穴である。終末期の小形鉢 2202 が出土した。

SP4212a は4区中央付近で検出した近代に属す小柱穴である。弥生時代の碧玉製管玉 T59 が混在した状態で出土した。片側穿孔で鉄針を使用する。

SP4325a は4区南西付近で検出した大形の柱穴である。ただし、周辺に組み合う柱穴が抽出できず、所属する建物が不明である。後期後半古段階の甕 2217 が出土した。

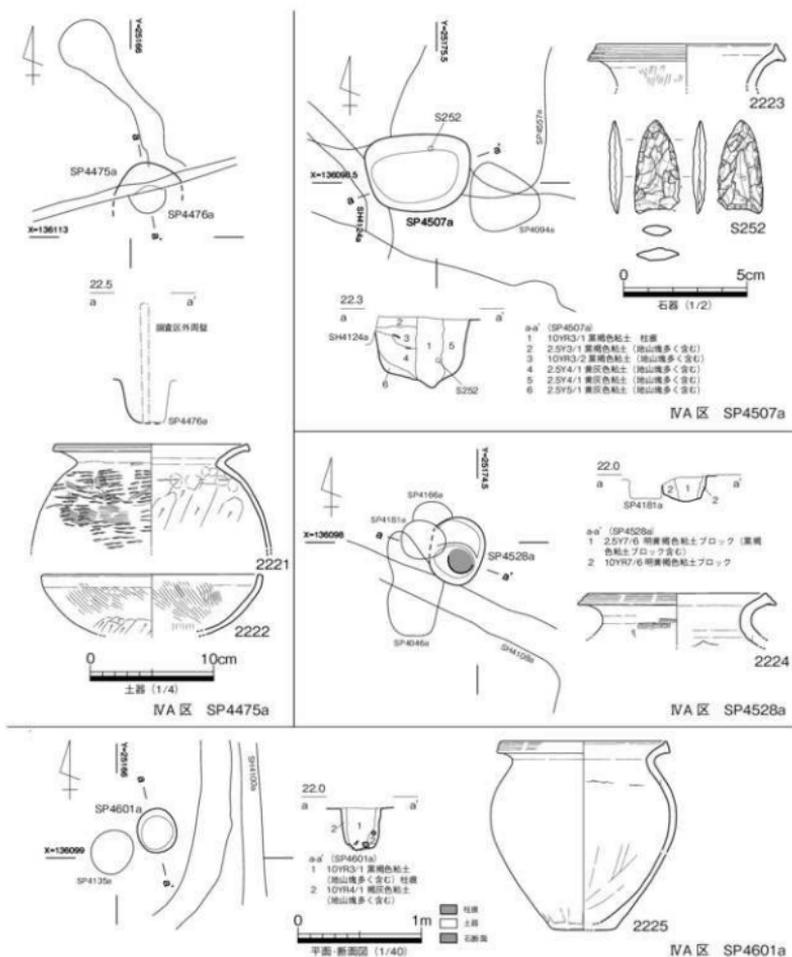


第 335 図 IV区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図 3

1区で検出したSK02（県教委1994）でも同時期の土器が出土している。

SP4475aはSH4016aの主柱穴SP4476aに隣接する柱穴で本来同一の柱穴である。便宜上ここで報告する。出土した甕2221と鉢2222はいずれも終末期に属す土器で、SH4016aの所属時期と矛盾はない。

SP4507aはSH4124aに切られ、後期前半新段階の掘立柱建物SB4566aの構成柱穴SP4557aを切る柱穴である。大形の柱穴だが組み合う柱穴が不明で、建物への所属が明らかでない。裏込め土より後期前半の壺2223とサヌカイト製打製石鏃S252が出土している。切り合いからみて、後期前半新段階より



第337図 IV区 柱穴平・断面図 出土遺物実測図5

新しい時期に構築された遺構である。

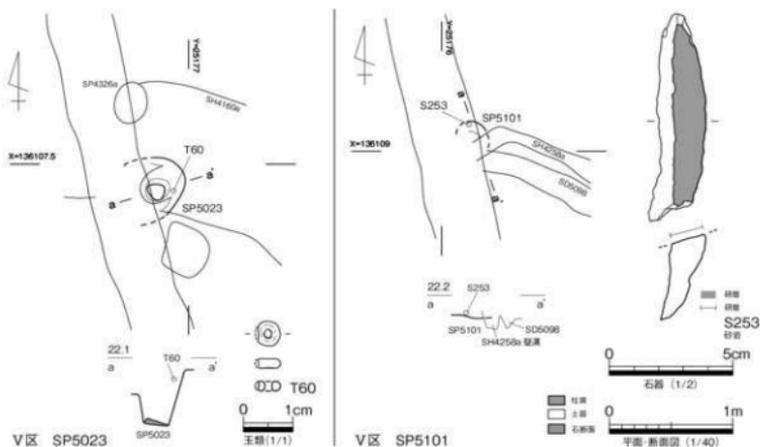
SP528a は SH4124a に切られる小柱穴である。後期前半古段階の壺 2224 が出土した。

SP4601a は SH4025a の床面で検出した柱穴である。主柱穴 SP4135a に隣接する位置にあり、主柱穴の掘替の可能性もあるが深さが主柱穴よりやや浅いことから、建物に切られる柱穴と見るのが妥当である。後期前半の甕 2225 が出土した。

(5) 5 区の柱穴

SP5023 は堅穴建物 SH4160a の床面相当の層位で検出した柱穴である。埋土中からコバルト着色の濃紺系カリガラスの小玉 T60 が出土した。扁平で小口整形が丁寧に行われた個体である。

SP5101 は 5 区南端で検出した小柱穴である。埋土中から砂岩製砥石片が出土した。研磨面の平滑度は # 2000 と高い。



第 338 図 V 区 柱穴平・断面図 出土遺物実測